



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「亡命」という選択肢：ニコライ・テルレツキーの『履歴書』をめぐって
Author(s)	阿部，賢一
Citation	スラヴ研究, 52, 99-117
Issue Date	2005
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39072
Type	departmental bulletin paper
File Information	52-004.pdf



「亡命」という選択肢

—ニコライ・テルレツキーの『履歴書』をめぐって—

阿 部 賢 一

緒 言

批評家リームが「チェコ知識人の亡命は、まったくもって 20 世紀の現象である」⁽¹⁾と述べているように、チェコにおける「亡命文学」研究は、これまでのところ、十分な蓄積がなされていない。アメリカに亡命したエゴン・ホストフスキー（1908-1973）、フランスに渡ったミラン・クンデラ（1929-）など、個々の作家について幾つかの論考⁽²⁾があるものの、「亡命文学」の全体像を把握しようとする試みは十分とはいえない。なかでも、複数言語を用いて執筆活動を行う作家たちについての研究は散見するのみで、ドイツ語で執筆する小説家リブシェ・モニーコヴァー（1945-1998）、フランス語とチェコ語で執筆する詩人ペトル・クラール（1941-）といった作家たちについては十分に論じられていないのが現状である⁽³⁾。亡命先の地で母語とは異なる言語を選択するこれらの作家は、バイリンガリズムという「認識論的な冒険」⁽⁴⁾に挑み、新たな文学の地平を切り拓こうとしている。「亡命文学」の性格そのものが政治的な特徴を有しているのは自明であるが、亡命作家のバイリンガリズムの問題は所与の文化圏における「同化」と関連している。また同時に、「亡命文学」という範疇は、旧来の「国民文学」の枠組みから逸脱した作家を扱うカテゴリーとしても機能することがある。母語とは異なる言語による創作は、「国民文学」という枠組みを希薄にするためである。上述の作家たちの言語選択の事例を検証すると、大半の芸術家たちが英語やフランス語といったいわゆる「メジャー」な言語を志向していることが分かる。そのような言語を選択した理由として、それぞれの言語文化への参画意識といった要因、あるいは、幅広い読者層の獲得という市場原理に依拠するものも指摘できよう。いずれにしても、亡命作家のバイリンガリズムは、個々の作家の出自そして社会的意識に深く関わっているのである。

このような趨勢が一般的であるなかで、母語がロシア語でありながら、チェコ語を創作の言語として選択した作家がいる。ニコライ・テルレツキー（1903-1994）である。彼は、1920 年代初頭にチェコスロヴァキア政府が受け入れたロシア難民の一人であり、社会主義体制下のチェコスロヴァキアからの亡命者でもあった。つまり、1920 年代のチェコス

1 John Glad, ed., *Literature in Exile* (Durham and London: Duke University Press, 1990), p. 22.

2 Ivan Papoušek, *Egon Hostovský* (Jinočany: H&H, 1996); Květoslav Chvatík, *Svět románů Milana Kundery* (Brno: Atlantis, 1994)などを参照。

3 モニーコヴァーに関しては、没後数年を経て、ようやくチェコにおいても関心が寄せられはじめており、2003 年 11 月には、モニーコヴァーに関する初めての国際会議が南ボヘミア大学の主催でチェスケー・ブジェヨヴィツェにて開催されている。

4 今福龍太「バイリンガリズムの政治学」『クレオール主義』ちくま学芸文庫、2003 年、357 頁。

ロヴェキアへの亡命、そして1960年代のオーストリア・スイスへの亡命という二度の亡命を体験している。さらに興味深い点は、執筆言語を母語の「ロシア語」から「チェコ語」へ移行させたことである。当初「ロシア語」で執筆していた作品は、戦後まもない時期に、二作品が「チェコ語」に翻訳され、プラハで出版されている⁵⁾。だが、それ以降、テルレツキーが（一部の私信などを除き）執筆言語として選択したのは「チェコ語」であった。1948年には、「チェコ語」で執筆した作品⁶⁾を発表するなど、「チェコ語」作家として本格的な活動を始めることとなる。けれども、その後の作品の大半は、国外の亡命出版社からの発表⁷⁾、あるいはドイツ語への翻訳などで出版されたのみで、チェコで「テルレツキー」の名前が聞かれることはほとんどなくなってしまった。1948年以降、チェコ国内で公開されたのは、『履歴書』⁸⁾のみである。みずから「自伝」と位置づけているこの著作では、テルレツキーの出自、プラハの亡命ロシア人社会、チェコ文化人との関係などが綴られているのみならず、ひとつの主題について考察が巡らされている。つまり、「亡命作家」という「自我」の模索である。本稿では、ニコライ・テルレツキーという作家の「自伝」を繙き、「空間」、「国籍」、「言語」の選択といった観点から考察を進め、テルレツキーをより広い文脈で位置付けることを試みる⁹⁾。

1. 亡命ロシア人社会としてのプラハ、あるいはテルレツキーの「空間」

本題に入る前に、テルレツキーに対する評価を整理しておこう。チェコの文学批評において、テルレツキーは十分な評価が下されていないばかりか、評価の対象として適切に扱われていないのが昨今の現状である。1948年に刊行された『風は戻ってくる』に所収されている短編が、1940年代の「チェコのサイエンス・フィクションの頂点」¹⁰⁾として、一部では位置づけられているのみで、作家事典¹¹⁾などではテルレツキーの名前すら見出すことはできない。また作品に関しては、太陽が熱を失いつつある状況下でガラス張りの建物に暮らす人々を描いた「風は戻ってくる」、崩壊した世界で生き残ったわずかな人々の苦悩を描く「洪水」など、初期の作品の多くが近未来を舞台に設定しているため、「亡命」という問題を明示的に取りあげてはいない。そのため、いわゆる「亡命文学」の文脈にお

5 Nikolaj Terlecký, *Šest metrů úsměvu* (Praha: Čin, 1946); Idem, *Den osmý* (Praha: Za svobodu, 1947).

6 Nikolaj Terlecký, *Vítr se vrací* (Praha: Knihovna Svobodných novin, 1948).

7 Nikolaj Terlecký, *Andělé tady nebydlí* (Zürich: Konfrontace, 1976); Idem, *Pláž u San Medarda* (Köln: Index, 1977); Idem, *Don Kichot ze Sodomy* (Zürich: Cramerius, 1986).

8 Nikolaj Terlecký, *Curriculum vitae* (Praha: Torst, 1997).

9 例えば、沼野が提起しているように、「ジェンダー」「エスニシティ（民族）」「メディア」「ジャンル」などの要素を細かく設定することもできる〔沼野充義「ロシア文学の境界」『亡命文学論』作品社、2002年、300-334頁〕。本稿では、作家が暮らし、移動し、執筆する「場」としての「空間」、制度的な「帰属」としての「国籍」、創作活動に用いる表現媒体としての「言語」という三要素を設定したが、「エスニシティ」などの他の要素が密接に関連しているのは明らかである。ただし、テルレツキーの場合、後述するように、亡命「ロシア」人から亡命「チェコ」人という国籍上の移動があり、民族的な範疇よりも重要である。そのため、「エスニシティ」ではなく「国籍」を本稿での考察基準のひとつとして用いた。

10 Ivan Adamovič, *Slovník české literární fantastiky a science fiction* (Praha: R3, 1995), p. 223.

11 例えば、次の作家事典にはニコライ・テルレツキーの項目はない〔Kolektiv autorů, *Slovník českých spisovatelů od roku 1945. Díl I.-II.* (Praha: Brána - Ústav pro českou literaturu Akademie věd ČR, 1995-1998); Kolektiv autorů, *Slovník českých spisovatelů* (Praha: Libri, 2000)〕。

いて、テルレツキーが語られることはほとんどなかったのである。これに対し、『履歴書』は、著者自身が認めているように自伝的な特性を有している点から、「フィクション」を基盤としている他の作品とは異なる性格付けを有している。なかでも、「ロシア」的なものと「チェコ」的なもの葛藤というテーマが顕著に現れていることが、初期の作品との大きな相違点である。

テルレツキーよりも一世代下になる批評家セルゲイ・マホーニン（1918-1995）は、『括弧にくぐられた物語（選択肢）』¹²⁾と題された自伝において、「選択肢」（*alternativy*）という観点からみずからの生涯を考察している。ロシア人の父とチェコ人の母のあいだに生まれた自分そして「チェコ」という主体がたどった人生を、たとえ他者から付与されたと思われるような運命的な出来事であれ、あらゆることが複数の選択肢のなかから積極的に選択した出来事として論じ、「ロシア」的なものと「チェコ」的なものの内的な葛藤を語っている。故郷を離れることを強制され、新しい環境で「同化に対する自助努力、つまり、受け入れられることの希望」¹³⁾を感じる「亡命者」が所与の環境で何らかの「同化」を試みるのは当然であろう。同化の程度を測るひとつの基準として、亡命地での「言語」の習得が挙げられる。マホーニンの場合は、ロシア語とチェコ語の二言語併用の家族環境で育ったものの、雑誌などの公表に用いた言語がチェコ語であったため、「亡命作家」というカテゴリーから除外されている。テルレツキーの分類が一筋縄ではいかないように、マホーニンの分類もまた明確なものではない。しかし、この二人には、世代的な差異のほかに、「空間」という重要な要因により区別される。マホーニンはモスクワで生まれてから数週間後にチェコスロヴァキアへ移住し、人生の大半をチェコで過ごしたのに対し、テルレツキーは様々な空間を移動しているためである。彼が逗留し、暮らした都市空間を主だったものだけ列挙してみると、ペテルブルグ、トビリシ、イスタンブール、プラハ、ウィーン、チューリッヒといった具合になる。彼が踏破した道程をたどるだけでも興味深いのが、本稿では、およそ45年という人生の大半を過ごしたチェコでの生活に焦点をあてる。

まず、チェコスロヴァキアに至るまでの経緯を説明しよう。1903年、ペテルブルグで生まれたテルレツキーは、軍人であった父の転勤に伴い、チフリス（現在のトビリシ）などで幼少期を過ごす。モスクワの陸軍幼年学校に通い始めるとまもなくしてロシア革命が勃発し、父の影響そして制服に魅了され白軍への入隊を志願する。けれども14歳という若さであったため、ノヴォロシスクにあるという士官養成学校への進学を勧められるのだが実際にはそのような学校はなく、士官学校を捜し求めて、友人たちとカフカースを放浪することとなる。その後、運悪くチフスにかかってしまったテルレツキーは、クリミアのフェオドシアに搬送されるが、すでに白軍は後退を始めており、クリミア半島から船での南下を余儀なくされた。船内では十分な治療ができないため、岸壁に下ろされたテルレツキーがたどりついたのは、イスタンブールのロシア人学校であった。同郷の人々との環境に溶け込みはじめていた1921年9月、チェコスロヴァキア政府がロシア難民の多くを受け入れるという知らせが届く。「チェコ人については、スポーツが盛んなスラヴ人で、素晴らしいビールをつくり、できたての新しい独立国家を有していることぐらいしか知らな

12 Sergej Machonin, *Příběh se závorkami (Alternativy)* (Brno: Atlantis, 1995).

13 Paul Tabori, *The Anatomy of Exile* (London: Harrap, 1972), p. 37.

かった」⁽¹⁴⁾というテルレツキーら学校の生徒は、陸路でトルコ、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ハンガリーを經由して、チェコスロヴァキア南部の町モラフスカー・トシェボヴァーへと向かう。「心地よい驚きを抱いた」⁽¹⁵⁾というモラフスカー・トシェボヴァーは、マホーニンが「チェコスロヴァキア共和国がロシア人学校を設置したのは、モラヴィアのドイツ人都市のモラフスカー・トシェボヴァーだった」(強調はマホーニン)⁽¹⁶⁾と述べているように、人口の8割をドイツ系が占める町であった⁽¹⁷⁾。

チェコスロヴァキア政府がイスタンブールにいたロシア難民を受け入れた背景について、簡単に触れておく。チェコスロヴァキア政府が立案した「ロシア援助計画」は、教育の分野に重点が置かれていたため、研究者や学生が優先的に受け入れられることになっていた⁽¹⁸⁾。このような層が積極的に受け入れられたのは、ロシアが新しい民主的国家として誕生した暁には、国家の政治を担う未来の知識人たちとのパイプをつくっておきたいというマサリクらの意向が働いていたとされる⁽¹⁹⁾。1921年7月28日に「ロシア人学生の支援活動」が議会で承認され、チェコスロヴァキア外務省には1921年のみで一千万コルナの予算が付与されている⁽²⁰⁾。実質的な支援活動が、エスエル派の組織ゼムゴル⁽²¹⁾に委ねられていたことから、チェコスロヴァキア政府の意図が看取される。そのため、ソ連邦が欧州各国によって承認されていくにつれ、チェコスロヴァキア政府のロシア難民に対する政策の変更が余儀なくされ、1926年には活動母体がゼムゴルからチェコスロヴァキア赤十字に移管される。政治的なレベルから人道的なレベルへ支援の色合いが変わったのである。いずれにしても、チェコスロヴァキア社会が「誇るべき」⁽²²⁾支援活動の成果もあり、ロシ

14 Terlecký, *Curriculum vitae*, p. 44.

15 Ibid.

16 Machonin, *Příběh se závorkami (Alternativy)*, p. 62.

17 A・コプシヴォヴァーは、1920年代初頭のモラフスカー・トシェボヴァーでは、約8千人のドイツ系住民が居住しており、全体人口の81%に相当するとしている [Terlecký, *Curriculum vitae*, pp. 148-149.]

18 マサリクはロシアの知識人に対する支援の重要性を、以下のように述べている。「ブラハでは、ロシア大学を組織している。目下のところ、およそ1400人の学生と60名のロシア人教師の面倒を見ている。みじめな亡命生活による幻想やモラルの低下を回避し、ロシアのインテリゲンツィア、なかでも若者たちに体系的な作業になれてもらうことが、主な目的である。ある程度の時間がたてば、準備ができたロシアのインテリゲンツィアがロシアに戻ることもできるのだ。他国にいる学生をすべてブラハで受け入れることは可能であるが、そのためには経済的な支援が必要とされる」 [Tomáš Garrigue Masaryk, "Pomoc Rusku Evropou a Amerikou" (počátkem r. 1922), in T.G. Masaryk, Edvard Beneš, *Otevřít Rusko Evropě* (Praha: Společnost Edvarda Beneše, 1997), p. 19]。また、ここで言及されている「ロシア」とは、民族としての「ロシア人」ではなく、かつてのロシア領内にいた人々という広い意味で用いられている。それゆえ、ウクライナ自由大学の設立など、ウクライナやベラルーシの亡命者に対しても支援が行われている。

19 スラーデクは、亡命ロシア人の受け入れについて、マサリクの親口政策のほかに、当時のチェコスロヴァキア国民の大半が親スラヴ的な考えを有していたことをもうひとつの重要な要因としてあげている [Zdeněk Sládek, "Ruská emigrace v Československu (Problémy a výsledky výzkumu)," *Slovanský přehled* 79:1 (1993), p. 1]。また、亡命ロシア人の大量受け入れのもうひとつの背景には、ロシアに駐留していたチェコスロヴァキア軍の存在があったことも、指摘しておかなければならない [Ivan Slavický, *Osudová setkání. Češi v Rusku a Rusové v Čechách 1914-1938* (Praha: Academia, 1999)]。

20 Světlana Tejchmanová, "Politická činnost ruské a ukrajinské emigrace v Československu v letech 1920-1939," in Václav Veber, ed., *Ruská a ukrajinská emigrace v ČSR v letech 1918-1945* (Praha: Seminář pro dějiny východní Evropy při Ústavu světových dějin FF UK, 1993), p. 3.

21 ブラハにおける「ゼムゴル」の活動については、*Постников С.П. Русские в Праге 1918-1928 гг. Прага, 1928*. C. 9-19 を参照。

22 Sládek, "Ruská emigrace," p. 13.

ア人向けの大学・研究機関が次々と設立され、1920年代前半のプラハは「ロシアのオックスフォード」⁽²³⁾と呼ばれるほどであった。

しかし、1920年代後半になると、亡命ロシア人社会の様相は変わりはじめ、政府の支援も下火になったため、ロシア系の教育機関に通う学生数も減少するばかりであった。テルレツキーが中等教育を修了した時がまさにこの時期で、テルレツキーはロシア人向けの教育機関ではなく、プラハのカレル大学哲学部の入学を選択する。モラフスカー・トシェボヴァーという牧歌的な環境からプラハという都市空間への移行は、彼にあらたな刺激を注入することとなる。大学で「スラヴ文学」を専攻した彼の文学に対する意識への刺激である。以前から、詩や小説を綴っていたわけだが、プラハという文学空間に居ることにより、いわゆる「文学界」が身近に感じられるようになったのであろう。積極的にロシア語新聞を読み、とりわけ亡命ロシア文学の重鎮アダモヴィチやホダセーヴィチの文章に魅了されるようになる。テルレツキーはじめ、プラハの亡命ロシア人の多くが第一に模範としていたのは、ロシアの「パリ」だった。

「パリ」の詩人たちに瞠目していたのは、かれらがとても繊細で、教養があり、パリに生活をし、そしてかれらの詩が本物だったからだ。個人的にもっとも魅了されたのが、ボリス・ポブラフスキーとマリーナ・ツヴェターエヴァだった。彼女の「若者」という詩は暗唱し、内容と形式のどちらが重要かと葛藤しているとき、あるいは酔っ払ったときに読み上げていた。散文家のなかでは、シーリングが一番のお気に入り、とりわけ『断頭台への招待』はまったく新しいものであるように思えた。メレシコフスキーも好きだったが、半分過去で、半分現在の人という印象を受けた。イリヤ・エレンブルグもお気に入りの作家の一人だった。下手にユーモアをまじえたり、悲壮感を漂わせて、西側で見たことを書いている作品は好きではなかったけれども⁽²⁴⁾。

テルレツキーが、パリで発行された媒体を通じて、ツヴェターエワ、ナボコフ（シーリンは亡命時代のペンネーム）などの当時の代表的な作家に注目していたことが分かる。しかし、おそらく彼が読み耽っていたのは、パリ発の文章だけではなかった。亡命ロシア社会から見た当時のプラハは、確かに亡命者の数や規模といった点において、パリに劣っていたとは言え、亡命ロシア人社会の第二、第三の都市として重要な位置を占めていた。例えば、1919年から1928年にかけて出版されたロシア語雑誌は、『ロシアの意思』といった代表的なものを含め、80ほどあったと言われている⁽²⁵⁾。この都市の「異端性」⁽²⁶⁾がしばしば指摘されるように、プラハが亡命ロシア社会において果たした役割は看過されるべきものではなかった。

23 Z. Sládek, "Prag: Das 'russische Oxford,'" in Karl Schlögel, eds., *Der große Exodus. Die russische Emigration und ihre Zentren 1917 bis 1941* (München: C.H. Beck, 1994), pp. 218-233; Jindřich Toman, "A Republic of Scholars: Elements of Cross-Cultural Integration in Interwar Prague," in Toman, *The Magic of Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle* (Cambridge-London: The MIT Press, 1995), pp. 104-133; Catherine Andrejev and Ivan Savický, *Russia Abroad: Prague and the Russian Diaspora, 1918-1938* (New Haven-London: Yale University Press, 2004).

24 Terlecký, *Curriculum vitae*, pp. 66-67.

25 John Glad, eds., *Conversations in Exile* (Durham and London: Duke University Press, 1993), pp. 8-9.

26 諫早勇一「ナボコフとプラハ」『言語文化』第4巻第4号、2002年、695頁。

だが、当時のロシア語雑誌あるいは亡命ロシア文学に関する研究書では、ニコライ・テルレツキーへの言及はほとんど見られない。プラハの亡命ロシア文学と距離を置いていたののだろうか。いや、そうではなく、亡命ロシア社会の中心都市パリに憧れを抱いていたテルレツキーは、みずからも文学への道を歩もうと決心していた。そして、プラハの亡命ロシア文学の重鎮であったアルフレッド・ベーム教授を通じ、「詩人の庵」(Скит поэтов)⁽²⁷⁾との接触も試みているからである。

あるとき、ベーム教授は、何篇かの詩を朗誦するようにと、わたしを「詩人の庵」という文学サークルに招いてくれた。「庵」では、のちに最良の友人となるウラジーミル・マンスヴェトフ、エウゲニー・ゲッセンと知り合いになった。[...] わたしが詩を読むと、さぼどわるくないと判断された。ベームは黙っていた。別れ際にわたしの肩に手をかけ、才能があるのだから、辛抱強ければ、「庵」のメンバーにしてもよいとわたしに告げた。けれども、わたしがメンバーになることはなかった。一年後に、わたしが書いたばかりの小説の一章を読むと、ベームは失望した様子を見せた。マンスヴェトフとゲッセン以外の誰もが落胆し、わたしには才能がないばかりか、大変な悪趣味を持ちあわせていると批判した。その一節のみばかりか、小説自体の未熟さを自分でも認め、わたしはすぐに原稿を焼いてしまった⁽²⁸⁾。

このようにして、テルレツキーの処女作はベーム教授からは評価されず、テルレツキーが「庵」の一員となることはなかった。だが「庵」のメンバーだったマンスヴェトフ、ゲッセンらとの親交は1940年代初頭までつづいた。ベームらに読んで聞かせた作品の内容およびその文学性については知る由もないが、大教授の拒絶にも屈せず、テルレツキーはひたすら小説を書き続けていた。しかし、彼の創作活動は、「庵」などの亡命ロシア人社会を対象とした執筆ではなく、発表のことを念頭に置かない内密な行為となりつつあった。1930年代には大学を辞め、ロシア語教師、美術学校のモデル、そして劇場のダンサーといった職を転々とし、その日暮らしをするようになっていた。当時の暮らしぶりについては、次のように語っている。

1936年までわたしは普通に暮らしていた。ロシア語の授業をし、芸術産業大学でモデルになり、夜になると、ロシア人の友だちとはダリボルカやユーゴスラフスカのワインクラーで会い、チェコ人とはナーロドニーのカフェやメトロで会い、政治のことは話題になったが、歴史的な事柄についてはあまり話題に上らず、文学のことにはあまり触れず、まして個人的なことはまったく話さなかった。小説や詩を書くことはやめていた。わたしが書いていたのは、自分が書いているのを理解してくれる誰かのためであって、それは友人とのある種の文通であった。けれども、

27 「詩人の庵」に関しては、以下の論文を参照。Белошевская Л. «Скит» и русская литературная Прага // Русская, украинская и белорусская эмиграция в Чехословакии между двумя мировыми войнами. Praha: Národní knihovna, 1995. С. 214-220; Малеви́ч О.М. Вокруг «Скита» // Там же. С. 221-229; Малеви́ч О.М. К вопросу о роли А.Л. Бе́ма в русской культуре первой половины XX века (А.Л. Бе́м в пражском «Ските») // Зарубежная Россия 1917-1939. Санкт-Петербург: Европейский дом, 2000. С. 308-314.

28 Terlecký, *Curriculum vitae*, pp. 64-65.

1934年から1936年にかけて、友人たちはわたしが書いていることに関心を失い、文学や文通に費やす時間がなくなってしまった。その頃にはもう、わたしは踊りもやめていた。チェコ人とドイツ人のあいだには、緊張が日に日に高まっていたため、ドイツ劇場で踊ることは政治的に好ましくないとわたしは考えたからだ。⁽²⁹⁾

1920年代の亡命ロシア社会がある程度機能していた時代はすでに過去のものとなり、戦争の足音が忍び寄る30年代には、「チェコ人」と「ドイツ人」の緊張関係を感じながら、プラハにおける亡命ロシア人として疎外感を強く感じるようになっていた。この時期のテルレツキーは、プラハという都市空間にいながらも、激変していく社会構成の流れの中で自分の居場所を模索しようと試みていたように思われる。ロシア語で書いた作品がベーム教授らに認められなかったがために、テルレツキーはロシア人社会の色に染まることはなかった。それゆえ、テルレツキーはみずからが帰属する場所を「亡命ロシア人社会」ではなく、他の空間に見出そうとしたのであった。

2. 「アトランティス」というロシア、あるいはテルレツキーの帰属「国籍」

では、テルレツキーの祖国ロシアへのまなざしは、どのように変容しているのだろうか。ロシア南部からの脱出、イスタンブールそしてモラフスカー・トシェボヴァーのロシア人学校での生活、ロシア人女性との二度の結婚、文学グループ「庵」への接近、プラハのロシア人社会など、つねに「ロシア的」な要素に囲まれた環境で育ったテルレツキーだが、幼少期について言うと、「ペテルブルグ生まれ」という意識を持っていたに過ぎなかった。子供の頃から、父に連れられてペルシアなどに渡っていた少年にとって、ロシアの国境はあまり意識されるものではなかった。ただ、生まれ故郷の「東に連なる扉があり、また西へ開け広げられた窓のある都市」⁽³⁰⁾のことだけがつねに彼の胸のなかにはあった。

おそらく「ロシア」という総体を意識しはじめたのは、ロシアで内戦が始まり、自らの居場所を捜し求めるようになった時期からであろう。ロシア以外の欧米や中東の人々が軍人であった父親のもとをたずねるというある種のコスモポリタンの環境で育ったテルレツキーにとって、それ以前は「祖国」という概念は希薄であったと言わざるをえない。ロシア革命の勃発により、軍服の格好よさに魅せられ、白軍への入隊を決める。しかし、未成年であったテルレツキーは、士官学校をもとめて、トゥアプセなどの黒海沿岸の都市を放浪する。すでに南部戦線の状況が悪化していたため、白軍の大半とともに、テルレツキーは戦闘に参加することなく、前線から撤退する。白軍の敗走兵を大量に乗せた船から眺めたのは、クリミア半島の一景色であった。「フェオドシアは、わたしがはじめて見たクリミアの町だった。[...]そして、ロシアに永遠の別れを告げた船から眺めた最後の町でもあった」⁽³¹⁾。この一文は、『履歴書』全編を通じて、ロシアへの感傷的な眼差しが唯一見受けられる箇所である。いずれにしても、テルレツキーと「ロシア」の大地との結びつきは

29 Ibid., pp. 77-78.

30 Ibid., p. 7.

31 Ibid., p. 30.

希薄であることは指摘しておかなければならない。だが、みずからのアイデンティティから「ロシア」的なものを完全に消し去ったわけでもない。ドイツ系が人口の大半を占めるチェコスロヴァキアの町、さらにプラハの都市空間に生きた彼が祖国を回顧する時、彼の「ロシア」像はひとつの表現に集約される。そう、端的に言うと、ロシアは「アトランティス」であった。

その頃のわたしは、ロシアをアトランティスのようにとらえていた。つまり、素晴らしいが、もはや実在しないものとして。プーシキン、トルストイ、ドストエフスキー、サルトゥイコフ＝シチュドリン、ゴーゴリ、アンドレイ・ペールイらとともに水没してしまったもの。ソ連邦について知るものはひとりとしていなかった。あるときは無限の可能性を秘めた国と評され、またあるときはあらゆる可能性が厳しく制限され、さらにはすべてを打ち砕かれた国と言われていた。アトランティスは、時として良いものとして、そして悪いものとして現れた。マヤコフスキー、ブローク、パステルナーク、エセーニン、セラビオン兄弟の作品を読むと、それはよきアトランティスだった。その一方で、来るべき共産主義の楽園のために懸命になり、強制収容所に片足を突っ込んでいるようにして生きている姿を考えると、アトランティスは悲劇的な実験としてしかとらえられなかった。[...]わたしが生活していたのは、アトランティスではなかった。わたしが暮らしていたのは、プラハ、チェコスロヴァキア、設備の整ったヨーロッパ、メキシコ湾流とサハラの暖かい乾燥した空気で温められた地⁽³²⁾。

故郷を「アトランティス」大陸になぞらえ、「素晴らしいが、もはや実在しないもの」という表現には、すでにこの時、ロシアとの決別を表明していることが分かる。ロシア、より正確にはソ連の地への帰還はまったく考えておらず、現実的な視線のもと、プラハという都市空間での生活を上位に置いている。それゆえ、ナチス・ドイツの保護領時代そして戦後の二度にわたり、パスポート申請のために国籍を選択する必要に迫られた時、彼は「ソ連」国籍を選択することが出来たにも関わらず、「チェコスロヴァキア」国籍を選択している。

1939年、チェコがナチス・ドイツの保護領になった時、テルレツキーは、ポトカルバツカー・ルス（現在ウクライナ領のムカチェヴォ）という町にいた。ハンガリー軍に占領されたこの町からプラハへの移住が先決と考えたテルレツキーは手続きのため司令部へ赴いた。住居移転許可証は即座に発行してくれたものの、パスポートの有効期限が切れていたため、最終的な判断は上官に委ねられた。テルレツキーは、士官とのやりとりを次のように書いている。

「士官は」わたしのパスポートを一瞥すると、なにか大声でわめきちらし、赤ペンで斜線をパスポートに書き込んだ。通訳によると、このパスポートが最後に延長されたのはムカチェフであるため、わたしはポトカルバツカー・ルスに帰属するというのが彼の見解だった。申請しなければもらえないハンガリーのパスポートがなければ、国境を渡れない状況だったのだ。ここには二年足らず

32 Ibid., p. 67.

しか滞在していないとわたしが反論しても、わたしはチェコ人でないのだから、チェコスロヴァキアですることなどないはずだと返答したのである⁽³³⁾。

「チェコ人」ではないテルレツキーが、ハンガリー軍統治下のムカチェフからプラハへの移住を望んだのは、ある意味では当然の選択であろう。ムカチェフでは、ロシア語の教師という稼業も頼りにはならず、保護領とはいえ生活が比較的安定し、知人も多数いたプラハの方が生活面からもより適しているように思われたからである。さいわいにも、地元のハンガリー語新聞の編集者、小学校の教員、そして正教の装束を身に纏ったアレクセイ神父といったテルレツキーの友人が翌朝司令部を訪れると、上官は何も言わずに、住居移転を認める手続きを命じたのであった。そのため、テルレツキーは保護領下のプラハへ合法的に移住することができたのである。

この選択が、戦時中の混乱のなか、限られた選択肢のなかからの決心であったとしたら、1945年5月、つまりソ連軍によるプラハ解放後の選択は、当然のことながらまったく異なる性質であった。親ソ連一色のなかで、テルレツキーはソ連邦の市民権を正当に申請する権利を持ち合わせていたからである。

ロシアからの亡命者が全員そうだったように、わたしもまた内務人民委員部で取り調べを受けた。おそらくわたしの素性はすべてわかっていたのだろう、質問は多くはなく、ただ、ソ連邦の市民権の申請を希望するかどうかたずねてきた。わたしの答えは、希望しない、だった。当時、亡命者のかなりの人がソ連邦の市民権を申請していた。わたしがソ連邦の市民になり、モスクワに戻ると、ドゥルダは思っていたらしい。けれども、わたしはチェコスロヴァキアの市民権を申請したことをかれに告げた⁽³⁴⁾。

テルレツキーはみずからの意思でチェコスロヴァキアの市民権を選択したのだが、この決断はチェコの友人たちを驚かせるものだった。彼は申請した理由としてこう述べている。「わたしはチェコ人とともに良いことも、悪いことも数多く体験し、かれらの運命はわたしの運命と共にあった」⁽³⁵⁾からだ。保護領の厳しい時代を乗り越え、ある種の意識を共有することができたのは理解されるが、それにもまして、テルレツキーの決断の根底をなしていたのは、大樹によりかかろうとしない断固とした思いだった。つまり、「わたしは勝者の仲間ではなかったし、戦闘もしなかった。わたしは下にいた」⁽³⁶⁾というテルレツキーの解釈に依拠している。けれども、「ロシアからの亡命者の多くは、アメリカへ逃れたり、逮捕されたりして、姿を消して」⁽³⁷⁾しまい、かつての「ロシアのオックスフォード」は跡形もなくなっていた状況を勘案すると、テルレツキーに残された可能性は、チェコ社会への接近という選択肢だけだったとも見ることができる。またチェコ人と自分の運命を重ねあわそうとするテルレツキーは、ある幻想を抱いていたことをみずから認めている。将来

33 Ibid., pp. 89-90.

34 Ibid., p. 103.

35 Ibid.

36 Ibid.

37 Ibid.

のあるチェコスロヴァキア社会という理想である。

1948年2月に社会民主党が加わった共産党が政権を奪取したとき、わたしはドブジーシュ〔訳注：ボヘミア中部の町〕にいた。人々は西側へ逃亡しはじめた。かつてゲッセンがドイツは文化的な国家だから、ユダヤ人を迫害することはないと言っていたように、わたしは、チェコスロヴァキアは民主国家だから、異なる思想を持つ市民を虐げることなどないと主張していた。それで、わたしはそこに残ったのだ⁽³⁸⁾。

ロシアの友人たちが次々とプラハを去っていくなか、テルレツキーはチェコ人との交流を自然と深めるようになっていた。なかでも親しくなったのは、ヤン・ドゥルダ(1915-1970)、オタカル・ムルクヴィチカ(1898-1957)、コンスタンチン・ビーブル(1898-1951)、カレル・コンラート(1899-1971)、それにヴィーチェスラフ・ネズヴァル(1900-1958)⁽³⁹⁾といった面々だった。チェコがナチス・ドイツの保護領となった1940年代前半、生計をたてるべくテルレツキーが始めたロシア語教師という職業がその契機となった。というのも、「ちょうどロシア語がふたたびブームになっており、生徒をたくさん集めることができた」ためである。「なかでも一番優秀だったのがヤン・ドゥルダで、最低だったのがヴィーチェスラフ・ネズヴァル」⁽⁴⁰⁾だったという。

テルレツキーの処女作の翻訳者として名前を連ねているのが、マリエ・マイエロヴァー(1882-1967)であるが、彼女と知己を得たのもこの時期である。作家ヤロスラフ・クラトフヴィル(1885-1945)に仲介され、マイエロヴァーと知り合いになると、「[テルレツキーの]短編小説はチェコ人のあいだで話題になりはじめ」⁽⁴¹⁾ていたため、彼女はテルレツキーの作品をチェコ語に翻訳することを即決していたという。マイエロヴァーは、社会主義リアリズムの代弁者として活躍した人物で、当時、自らが編集長をつとめる雑誌「チン」、ならびにその発行母体である同名の出版社に多大な影響力を持っていた。そのため、戦後マイエロヴァーの翻訳によるテルレツキーの著作が出版されたのも、「チン」社からであった。

上述したチェコ文化人のリストを一瞥すると、あることに気がつく。マイエロヴァー、ドゥルダ、ネズヴァルといった面々は、いずれもチェコの社会主義リアリズムの文脈で語られる作家たちだということである。左翼系知識人の大半がロシア語という媒介を通し、ソ連文化に傾倒していたため、「ロシア語話者」であったテルレツキーはチェコの知識人と懇意になった経緯が想定される。しかし、それゆえに、1948年以降の共産主義体制下において「亡命ロシア人」テルレツキーは微妙な立場に置かれ、かつては親交があったチェコの文化人たちは次々とテルレツキーと袂を分かつ⁽⁴²⁾。テルレツキーが望んだ「同化」は十分に進展することはなかったのである。

38 Ibid., pp. 106-107.

39 Ibid., p. 90.

40 Ibid., p. 91.

41 Ibid., p. 93.

42 例えば、チェコ文学資料館に保管されてあるマイエロヴァーの遺稿・書簡記録のなかに、テルレツキーとの交友を示す記録はなく、1948年以降、テルレツキーに関する文通等を意図的に処分した可能性が考えられる。

3. 「異邦人」というアイデンティティ、あるいは「言語」という選択肢

テルレツキーがチェコ語で文学作品を執筆し始めた時期を特定することはできないが、おそらく戦後の早い段階であったと思われる。ロシア語で執筆した『第八の日』(1947)を、チェコ人の妻と一緒にチェコ語へ翻訳しており、読者層としてチェコ語話者がすでに想定されていたことが理解できるからである。またそれに先立って出版されたのが『微笑みの六メートル』(1946)で、翻訳をしたのが上述のマイエロヴァーであった。この作品が出版された時、日刊紙『ムラダー・フロンタ』にテルレツキーの著作への書評が掲載された。全体的には好意的なトーンで記されてあったが、その理由は、作品の内容以前に「[本の]葉にロシア語からの翻訳者がマリエ・マイエロヴァーと記載されていたため」⁽⁴³⁾であったという。またその書評の執筆者は、初歩的かつ根本的な過ちを犯してしまった。「ソヴィエト文学」と「亡命ロシア文学」を混同し、記事に「ソヴィエト文学のニュー・フェイス」という題名をつけたためである⁽⁴⁴⁾。

〔書評が掲載された〕その日のうちに、わたしと同じ建物に住んでいたコマロフスカが立ち寄り、この記事を読んだフィエルリングエルが激怒し、『ムラダー・フロンタ』に至急電話をかけ、24時間以内に訂正文書を公表することを指示するように言われたとわたしに告げた。その訂正文を發表しなければ、チェコスロヴァキア政府とソヴィエト大使との関係が好ましいものではなくなると判断したのだ。翌日、複数の新聞に訂正文が公表された。そこには、「……は事実ではなく、真実は……であり」、「著者は、ロシアからの亡命者にすぎず、たいした作家ではない」と記されてあった。『ムラダー・フロンタ』の担当編集者がどういった処遇を受けたのかは知らないが、おそらく解雇されたのだろう。というのも、当時、亡命ロシア文学とソヴィエト文学を取り違えることは、決して許されることではなかったのだから⁽⁴⁵⁾。

テルレツキーに関する記事に激昂した人物こそ、戦後のチェコスロヴァキア首相であったズデニェク・フィエルリングエル(1891-1967)である。テルレツキーは、マイエロヴァーの仲介により、フィエルリングエルの通訳兼秘書をコマロフスカとともに戦後まもない頃に務めていた。首相の秘書官であった「亡命ロシア人」が「ソヴィエト文学」の新顔として新聞に掲載されることは、親ソの立場をとるフィエルリングエルにとって、決して好ましい出来事ではなかった。たしかに、マイエロヴァーによる翻訳はテルレツキーの知名度を一時的に高める役割を担ったが、同時にテルレツキーという作家の位置づけの難しさを露見することにもなった。つまり、どの範疇に帰属するのかという問題である。「亡命ロシア作家」と銘打つのが適当であったが、既述の政治的な背景により、そのような名称を前面に出すことはできなかったのである。

このような状況にも関わらず、小説『第八の日』、短編集『風は戻ってくる』が運良く

43 Terlecký, *Curriculum vitae*, pp. 105-106.

44 Ibid., p. 105.

45 Ibid., pp. 105-106.

相次いで出版される。また1948年にはチェコスロヴァキア作家組織への加入が認められ、同時にチェコスロヴァキアでの市民権が正式に認められ、有望な作家としての一步を踏み出したかのように思われた。多くの文化人同様、夢のような創作期はわずか三年で幕を下ろすこととなる。1948年のクーデタ後、新設されたチェコスロヴァキア作家連盟への入会がかろうじて認められたものの、その際の条件は「社会主義に肯定的な作品を三年以内に執筆する」⁽⁴⁶⁾というものだった。1963年になって、テルレツキーは同連盟から除名を言い渡されるが、その理由は十数年にわたり執筆活動を行っていないという旨であった⁽⁴⁷⁾。だが、詩人ヤン・ヴラジスラフが指摘しているように、テルレツキーは作品を執筆しなかったのではなく、出版することができなかったのである⁽⁴⁸⁾。「わたしの小説がチェコスロヴァキアで出版されることは可能であった。わたしが悪魔に魂をすこしでも売れば」⁽⁴⁹⁾と述べているように、体制の協力者となることだけが、出版への活路を見出す方法であった。けれども、テルレツキーは自らの信念を曲げることがなかったため、文字通り窮地に追い込まれてしまう。「わたしは無職になってしまった。労働局では、肉体労働は健康上の理由から適していないといわれ、その他の労働は政治的な理由から拒絶された」⁽⁵⁰⁾という一節からも、文字通りの社会的な疎外感を感じる状況であったことがわかる。苦境に陥っていたのは、もちろん、テルレツキーだけではなく、当時の体制に反旗を翻していたすべての芸術家に当てはまることである。だが、両大戦間期にプラハで苦労をともにしたロシアの友人たちは皆いなくなってしまうていた。苦悩に満ちた現実と直面する時、人は回想し、過去に思いを馳せる。テルレツキーが追憶するのは、ユダヤ系ロシア人の友たちであった。

自分はユダヤ人のことを理解していたと思う。強制収容所で命を落とした親友のエヴゲニー・ゲッセンはユダヤ人だった。戦争中ずっとテレジーンで過ごしたパヴェル・フィッシュルもまたユダヤ人だった。ユダヤ人であるかれらもまたわたしのことを理解してくれていたのだ。わたしが亡命者であったのと同様に、かれらはいつまでも異邦人でありつづけた。わたしもまた、共産主義のチェコスロヴァキアでロシア人であることは決して楽なことではないとようやく気づいたのだ⁽⁵¹⁾。

チェコ社会への「同化」というかつての理想は幻想であることに気づき、チェコスロヴァキアは自分にとっての「異郷」であり、ロシア人である自分は「異邦人」であることを心の底から自覚したのである。けれども、生まれ故郷は「アトランティス」として消失し、かつ、プラハでチェコ人に百パーセント「同化」することもできない。一個人として、また一人の作家としての明確なアイデンティティを持たないテルレツキーに残された道は、「自我」を極限まで追求をするばかりであった。

46 Ibid., p. 107.

47 “Z literárního archivu PNP. Publikáční možnosti Nikolaje Terleckého v rakouském exilu a pokusy o jeho rehabilitaci v roce 1968,” *Tvar* 11/21 (2000), p. 14.

48 Ibid., p. 15.

49 Terlecký, *Curriculum vitae*, p. 135.

50 Ibid., pp. 113-114.

51 Ibid., pp. 127-128.

わたしはチェコスロヴァキア市民であったが、書き方がチェコ人と異なっていると、作家連盟でも、チン、ザ・スヴォボドゥ、ボロヴィーといった出版社でも指摘された。わたしの処女作『微笑みの六メートル』が発表されたとき、新聞記者たちはわたしをどこに分類したらいいのかわからなかった。チェコ文学ではないことは明らかだった。そしてまたロシア文学でもなかった。ロシア人にとって、わたしはあまりにもそっけなく、簡略すぎている。おそらくセラピオン兄弟だけがわたしの作品になにか類似点を見出してくれるかもしれない。けれども、もう彼らもいなくなってしまった。もう存在しないロシアの文学グループに賛同する作家は、本当のチェコ作家であるのか？ チェコの過去、チェコのカフカ運動、チェコの「暗黒時代」、チェコの民族復興に対してまったく無関係である作家がチェコ作家になりうるのか？ それは、ありえない。ありえないのであれば、どうしてチェコスロヴァキア作家連盟で悪魔のような奴らと一緒に何をしているのであろうか？⁽⁵²⁾

人生のそれぞれの場面で選択を下し、運命を切り開いてきたテルレツキーであったが、彼の道程はあまりにも独特なものであったため、旧来の範疇からはつねに逸脱する羽目になってしまった。もちろん、テルレツキーみずからが下した空間、国籍、言語⁽⁵³⁾の選択は、彼自身の意思によるものである。けれども、他者による認識は、必ずしもテルレツキーが意図していたものと一致してはいなかった。それはなによりもまず、母語ではない言語による創作が招く困難、そして彼が歩んだ道程の複雑さに起因するものであった。これに対し、テルレツキーの「チェコ語」による執筆行為は「国民文学」の枠組みで語られがちな言説に対するささやかな切り崩しなのである。例えば、作家イジー・クラトフヴィルは、1990年以前のチェコ作家は「民族復興」に何らかの形で関与してきたと述べているが⁽⁵⁴⁾、彼の言葉を反対から解釈すると、チェコの「民族復興」に関与していない作家は「チェコ」作家ではないという論理になってしまう。このような理念の下、テルレツキーは「チェコ文学」のカテゴリーから除外され、ロシア語で作品発表する機会が得られず、また後にチェコ語で執筆したが為に「亡命ロシア文学」あるいは「ソヴィエト文学」の範疇から外れることになる。もちろん、「国民」文学という言葉の中で、テルレツキーを語ることがさほど生産的であるようには思われない。外側から提示されるレッテルがどのようなものであれ、様々な規範から逸脱した地点にテルレツキーが位置することは相違ない。しかしながら他者による認識により、「自我」が形成されることは既述したとおりである。けれども、他者による認識が誤謬に満ちたものであった時、自我の形成は内面に沈潜することによって育成されることとなるのかもしれない。

だが、結論を急ぐ前に、テルレツキー自身がどのような自己認識をしていたかに言及すべきであろう。ウィーン亡命後、チェコスロヴァキア政府外交官とのかけひきのなかで浮かび上がるテルレツキーの言葉は、このような文脈で非常に示唆的である。1965年12月14日、駐ウィーンのチェコスロヴァキア大使ホランは、亡命を申請したテルレツキーに

52 Ibid., p. 128.

53 テルレツキーの友人である詩人ヤン・ヴラジスラフが所蔵する書簡集を参照すると、綴りの誤り、完了体・不完了体の混同といった基本的な誤りが散見する。また、ヴラジスラフ本人から聞いたところ、『履歴書』の出版にあたり、語順などを大幅に修正する必要があったそうである。

54 拙論「現代チェコ文学における幾つかの傾向」『東欧史研究』第25号、2003年、67-73頁、を参照。

対する処遇を打診する次のような手紙を本国の外務省に送付している。

わが国と他国との文化・政治的な関係という点において、テルレツキーの事例が好ましくないのは、彼の戯曲のプレミア、おそらく大成功を収めるとされるプレミア […] が行われたとしたら、もしくは、海外でドイツ語あるいはその他の言語の翻訳で彼の著作が成功を収めたとしたら、演劇批評家、文芸批評家の間で 60 歳のテルレツキーの経歴が問われるに違いない。1948 年から 1965 年にかけてチェコスロヴァキアに滞在している間に、彼の手によるものは一行も発表されなかったという事実をもとに、敵対する作家そして自由欧州放送やその他の反体制組織や機関が、反チェコスロヴァキア社会主義共和国のプロパガンダとして容易に利用することには疑いはない⁽⁵⁵⁾。

つまり、テルレツキーがチェコスロヴァキア国外で知名度を高めたら、現体制にとっては不利になるという判断であった。大使は、亡命以前のテルレツキーの身辺調査、ならびに欧州諸国が訪問可能なチェコスロヴァキアの旅券の発行を本国へ依頼すると同時に、部下の文化担当官スターレクにテルレツキーとの接触を図るよう命じる。スターレクは、「亡命」ではなく、政府との了解の下で逗留していることをテルレツキーに提案する。これを受け入れれば、「 […] 外国で暮らすチェコ作家として生活することができ、国外のみならず、国内でも出版が可能になるように手配する」⁽⁵⁶⁾というのであった。これに対するテルレツキーの回答は断固としたもので、「わたしは二股をかけるつもりは毛頭なく、一度亡命者になった以上は、亡命者でありつづけると言い、彼の提案を拒絶した」⁽⁵⁷⁾。しかし、12 月に再び、テルレツキーの作品の上演が決まっていたザルツブルクのヨーロッパ・スタジオの演劇家ランゲルが、「わたし [テルレツキー] がスターレク博士の提案を受け入れ、外国で暮らすチェコ作家という立場を認めれば、国内にいるチェコ作家の助けになる」⁽⁵⁸⁾と説得工作を行っている。

テルレツキーの意思は固く、彼のとるべき道ははっきりとしていた。「自分は外国で暮らすチェコ作家にはなりたくないし、国内か、国外かのいずれかを選びたいのだと告げ、国内にはもう留まれないのだから、わたしはこれからも異邦人でありつづける」⁽⁵⁹⁾という言葉が、テルレツキーの回答であった。パリで亡命生活を続けている詩人ヤン・ヴラジスラフは、次のように述べている。テルレツキーは、「養子として受け入れられた故郷で異邦人となったが、それにもまして彼が優先したのは、見知らぬ地で異邦人となることだった」⁽⁶⁰⁾と。テルレツキーがその対価として支払わなければならなかったのは、あまりにも大きなものであった。すでに決まっていた戯曲の上演および出版がすべて取りやめになってしまったからである⁽⁶¹⁾。また 1948 年以降、チェコ語で書いた作品が生前に一度だけチェコ国内で公表されたことがある。ウィーンへの亡命直後、短編小説「夜」が雑誌「ブラメ

55 “Z literárního archivu PNP,” p. 14.

56 Terlecký, *Curriculum vitae*, p. 135.

57 Ibid.

58 Ibid.

59 Ibid.

60 Jan Vladislav, “Don Kichot z Petěrburgu,” in Terlecký, *Curriculum vitae*, p. 214.

61 当時、チェコスロヴァキア作家の海外での出版については「DILIA」というエージェンシーが窓口になり、一括して行っていた。テルレツキーの作品を出版しようとしていたウィーンの出版者は「DILIA」とも

ン」に掲載されたのである⁽⁶²⁾。つまり、1948 年以降発表されていなかった作品が、オーストリアへの亡命とほぼ時期を同じくして公刊される機会に恵まれたのだが、本人は活字になった自らの文章を目にすることはなかったのである。

4. テルレッツキーの位相

テルレッツキーの作品がこれまで十分に受容されなかった要因については、幾つか挙げられるが、何よりもテルレッツキーがたどったあまりにも複雑な道程を理解しなければならないことが最大の要因となっているのだろう⁽⁶³⁾。「見知らぬ地で異邦人」となることを選択したテルレッツキーは、スイスから永住を条件に滞在が許可され、1965 年、チューリッヒへ移住し、その地で晩年を過ごしている。『履歴書』を以下の一節で書き終えた時、テルレッツキーは 75 歳であった。

わたしがここで今書き終えたものは、芸術作品ではない。イスラームの「運命の書」に半分刻まれ、みずからのキリスト教徒の意思で半分しくじった生涯の許しを請う、ニコライ・テルレッツキーの生涯を描いた本当の自伝である⁽⁶⁴⁾。

この「自伝」作品を執筆した理由について、著者は次のように述べている。「どの人にも、自分の運命があり、指紋がそれぞれ異なるように、世界中に同じ運命をたどるものは二人としない。わたしは生涯をかけて、他者の運命を記した」⁽⁶⁵⁾と。自伝としての本作品では、批評家ノヴォトニーも指摘しているように、テルレッツキーが祖国の喪失というトラウマについて叙述している箇所は見受けられない⁽⁶⁶⁾。また筆者の視点については、カウトマンも指摘しているように「俯瞰」ともいえるもので、極端に主観的なものであったり、極端に修辭的なものであったりはしていない⁽⁶⁷⁾。「本当の自伝」という真正性を追求した結果、このような文体に通じたと見るべきであろう。

これまでニコライ・テルレッツキーという作家については、前述した通り、『履歴書』以

複数の契約を結んでいたため、スターレクらはテルレッツキーの作品を出版するならば、その他の契約に影響が及ぶとして、その出版者に圧力をかけたのである [“Z literárního archivu PNP” p. 14].

62 Nikolaj Terlecký, “Noc,” *Plamen* 7:8 (1965), pp. 2-11.

63 またこれに加えて、近年の誤謬に満ちた批評もその一因を担っているように思われる。例えば、『スロヴォ』紙に掲載された『履歴書』の書評は、「モラフスカー・トシェボヴァー」の代わりに「チェスカー・トシェボヴァー」と表記したり、友人としてはドゥルダ、ジェザーチ、マイエロヴァー、ネズヴァルといずれも旧体制を代表する文化人の名前しかあげておらず、テルレッツキーが旧体制側の作家と思わせるような記述が連ねられている [Jaroslav Šimůnek, “Ten, který dvakrát přežil vlastní smrt,” *Slovo*, 20. 1. 1997, p. 8].

64 Terlecký, *Curriculum vitae*, pp. 138-139.

65 Ibid., p. 138.

66 Vladimír Novotný, “Zaniklé mikrosvěty ruské Prahy,” *Tvar* 8:18 (1997), p. 21.

67 「テルレッツキーが選んだのは、軽い皮肉のまなざしを投げかける形態であった。その形態は、揺るぐことのない、初めから作り上げられているダイナミックな言葉遣いを有しているのだが、語りが持つ動的な『結び目』に規定されるものではない。『運命的な転換』と日常生活のアネクドットの出来事を格段区別することなく、出来事から出来事へと同じトーンで進んでいくのである」 [František Kautman, “Podivuhodný život podivuhodného spisovatele,” *Literární noviny* 9:3 (1998), p. 6].

前の一部の作品により「SF作家」⁽⁶⁸⁾として類別されていたにすぎず、『履歴書』を中心に
する「亡命作家」という評価は、ほとんどなされていなかった⁽⁶⁹⁾。プラハにおける亡命ロ
シア人社会との文脈で初めてテルレツキーを論じたのが、テルレツキーの『履歴書』であ
とがきを書いているアナスタシエ・コプシヴォヴァーである。彼女は、チェコにおける亡
命ロシア作家の系譜を次のように二つのグループに分けている⁽⁷⁰⁾。まず、ウラジーミル・
ネミローヴィチ＝ダンチェンコ（1858-1943）、エヴゲニー・チーリコフ（1864-1932）、
アルカージ・アヴェルチェンコ（1881-1925）といった人生の大半をロシアで過ごし、
ロシア語で執筆し、晩年をプラハで過ごした作家たち。第二に、チェコスロヴァキアで生
活し、チェコ語で執筆し、ロシアというルーツは作品の深層にしか垣間見られない作家と
して、セルゲイ・マホーニン、アレクサンドル・クリメント（1929-）、ミハル・アイヴァ
ス（1949-）などを挙げている。そして、テルレツキーを後者のグループの基盤をつくっ
た人物としている。つまり、チェコ語で執筆する初めての「亡命ロシア作家」という位置
づけである。だが、これだけでは、母語ではない「チェコ語」を執筆言語として用いたテ
ルレツキーの説明としては不十分であるように思われる。

それでは、「亡命作家」という範疇から検討すると、テルレツキーはどのような位相に
あるのであろうか。サイドが述べたように、「故郷が実在し、それを愛し、それと結び
ついているということこそ」⁽⁷¹⁾が亡命の基盤とするのであれば、放浪の生活を経てきたテ
ルレツキーを一義的に「亡命作家」としてカテゴライズすることは、根本的な誤謬となる。
亡命者が有する「防衛的ナショナリズム」⁽⁷²⁾という要素は、テルレツキーにおいてはあま
り見受けられないからである。根無し草のように様々な地を転々としてきたテルレツキー
にとって、そのようなあるひとつの空間への固執はふさわしいものではない。

そして彼の事例を複雑にしているのが、母語ではなく、また大言語でもない「チェコ語」
を創作上の言語として選択したことである。チェコ人と運命をとにもするというテルレツ
キーの発言についてはすでに引用したが、さらに鍵となる以下の一節を導き出すことがで
きる。

人間には、自分という個人のわずかな時間と空間しかない。わたしの体重は 65 キロ、身長は 172
センチ。年齢は 75 歳。このすべてがわたしであり、この空間と時間においてはわたしが主なので
ある。ある程度までは。わたしは、自分だけの空間と時間からまだ羽ばたいていない鳥なのであ
る。小さいながらも、確固とした自分だけの空間と時間、高さ、長さ、広さを有し、宇宙から守
られている鳥として存在するのは、非常に快適であった。けれども、他の未知の次元があったら
どうなるのか？ カレルはより多くを知っており、そのことを話すつもりがないとしたら？ も

68 Adamovič, *Slovník české literární fantastiky*, pp. 223-224.

69 この観点からの主要な研究としては以下のものがある [Anastasie Kopřivová, “Bludné cesty ruské emigrace,” in Terlecký, *Curriculum vitae*, pp. 175-183; Vladimír Novotný, “Jinakost okouzlené duše Nikolaje Terleckého,” in Novotný, *Problémy a příběhy* (Praha: Cherm, 2001), pp. 247-258; Vladislav, “Don Kichot z Petěrburgu,” pp. 207-218].

70 Kopřivová, “Bludné cesty ruské emigrace,” p. 182.

71 エドワード W. サイド著、島弘之訳「冬精神：亡命生活についての考察」『世界文学のフロンティア I 旅のはざま』岩波書店、1996 年、74-75 頁。

72 同上、72 頁。

し……？ それはナンセンスだ。この次元が認識されないのは、ただわたしが認識しようとしな
いからなのではないのか？ 自分が成長し、沈潜し、他の次元へ放たれるように、自分の意思を
断念すればよいのではないか？⁽⁷³⁾

本文中で言及されている「カレル」とは、ノーベル生理学・医学賞を受賞したフランス
の研究者アレクシス・カレル（1873-1944）のことである。彼が著した『人間、この未知
なるもの』⁽⁷⁴⁾は、テルレッキーがみずからのアイデンティティを失いかけ、二度目の亡命
を考えているまさにその時期に傾倒していた書物である。カレルの著作、そして読後に起っ
た様々な出来事を経て、形式的に正教徒であったものの、実質的には「無神論者」であっ
たテルレッキーは、カトリックへ転向する。それほどまでに、カレルの著作がどん底の精
神状態にあったテルレッキーに与えた影響は多大なものであった。それゆえ、この引用は
「多次元の探求」というテルレッキーの理念を表明するものしても解釈できよう。だが同
時に、この一節は、多層的な可能性を提示する「亡命文学」の一例として受けとめること
ができるように思われる⁽⁷⁵⁾。未発表の作品に対する評価は今後徐々に行われるとしても、
『履歴書』は、旧来の分類では語ることのできないテルレッキーの「作家」としての新た
な認識可能性を証明してくれたのではないだろうか。つまり、テルレッキーという「亡命
作家」は、愛郷と異郷という空間レベル、あるいは国籍といった制度的なレベル、さら
には母語とその他の言葉という言語レベルにおいても、多層的な「移行」を試みた作家だ
ということである。

スーザン・ソントグは、「異国的なもの、見なれないもの、他者に身をまかせる衝動と、
主として科学によって異国的なものを飼いならそうとする衝動との」⁽⁷⁶⁾あいだで現代の感
受性は動いていると説く。そして、「他者」が「自我」の苛烈な純化として体験され、そ
れと同時に「自我」はあらゆる経験の異域を植民地化することに余念がないとする。「他者」
の獲得により「自我」が形成されていくというソントグの見解を援用すると、テルレッキー
が「自我」を極限まで模索しながら綴った一作品として『履歴書』を位置づけることが
できよう。すなわち、人生の岐路での様々な決断、とりわけ「亡命」という選択肢を提示し
た書物としてである。

73 Terlecký, *Curriculum vitae*, p. 117.

74 邦訳で、アレキシス・カレル著、渡部昇一訳『人間、この未知なるもの』三笠書房、1992年、がある。

75 テルレッキーという作家の全体像を位置づけようと試みるのであれば、「超国家・脱民族文化的な新しい
人間の生活領域の探求に物語の主眼を置いた文学創造」としての「難民文学」との共通性を語ることも
可能であるように思われる〔西成彦「難民文学の希望と夢」『岩波講座—文学8・超越性の文学』岩波書
店、2003年、85-106頁〕。

76 スーザン・ソントグ著、由良君美訳「英雄としての文化人類学者」『反解釈』ちくま学芸文庫、1996年、120頁。

“Exile” as an Alternative: Some Remarks on Nikolaj Terlecký’s *Curriculum Vitae*

ABE Kenichi

There are many writers who write in a different language from their native one. This bilingualism is a political intention which reveals the power balance of languages; not a few writers choose a more major language over a minor one. Nikolaj Terlecký (born in Saint-Petersburg in 1903, died in Zurich in 1998) is one of the exceptions in this regard, for the reason that he made a decision to write his works not in Russian, his mother tongue, but in Czech, his acquired second language. Generally speaking, we could call him simply a “Russian émigré who wrote in the Czech language.” But this is not the only reason that his name rarely appears in references to “Czech literature” or “Russian literature in exile.” In this paper, the author tries to define the place of Nikolaj Terlecký within the broader context, especially by discussing his final work *Curriculum vitae*, published in Prague 1997.

In order to understand this autobiographical text, we should also understand his whole life. The life of Terlecký was characterized by certain changes from one pole to another: dwellings, languages and nationalities. After spending his childhood in Saint-Petersburg, he settled in the Caucasus where his father served in the Russian Army. With the outbreak of the Revolution in 1917, he tried to join the White Army despite the fact that he was still 14 years old. It was not long before he had to move to Istanbul with other soldiers. In 1921, Russian refugees in Istanbul received an offer that the government of Czechoslovakia would accept them as political refugees. This financial support made it possible for Terlecký and other Russian students to move to Moravská Třebová, a germanized village in Czechoslovakia. Since the financial support for Russian refugees in the early 1920s was focused particularly on education, with the aim of sending educated Russians back to Russia, Prague was known as the “Russian Oxford”; the city where the academic élite of the Russian empire congregated.

For the émigrés, there was a choice to be made: should they abandon their Russian identity and try to assimilate? Or, should they attempt once again to find a new and welcoming place of residence? Among these identity problems, Terlecký regarded Russia, his motherland, as “Atlantis,” i.e. “a beautiful place, but one which has already disappeared.” He tended to join Russian literary circles such as “Skit poetov” organized by Alfred Bem. Nevertheless, his first novel provoked no reaction from Russian friends; Terlecký had to seek other stimuli in Czech society. In the early 1940s, when Prague became a protectorate of the Reich, Terlecký encountered many Czech intellectuals such as M. Majerová, V. Nezval, J. Dudl, and others. These figures, influenced by Russian trends, sought a private teacher of Russian and found Terlecký to be a good one. This encounter posed Terlecký with the dual difficulties of his reception in Czech society. For example, Majerová as a representative activist was willing to translate his Russian texts to Czech, to help to find a publisher for his first work and to find a job as a translator for Z. Fierlinger, the first Prime Minister of Czechoslovakia after World War II. Unfortunately, the critics did not know how they should categorize Terlecký: he was neither a Czech writer, nor a Soviet one. At that time, it was impossible to call him a Russian writer in exile for political reasons. This is one reason why the relationship with these representatives of Czech socialist literature forced him into a tight corner. After the coup d’état in 1948, most of his ex-friends became official representatives of Czech culture and simultaneously severed their connections with Terlecký. These

circumstances left him in a very difficult position, because he was on the “black list” of Czech literature, but he did not belong to Soviet literature.

His second exile to Austria and Switzerland would be interpreted as a quest for liberty or a search for his own identity, called only by his name. Since he could not assimilate into the Czech community, he was forced to find his own land. As Jan Vladislav says, Terlecký made a choice to “be a stranger in the unknown place, even though he became a stranger in the homeland where he was adopted.” This reflects on his choice of language; the choice of the Czech language is connected with the ideal that Czechoslovakia as a democratic state would not eliminate the possessor of different thoughts. In the late 1940s when assimilation into the Russian community had already become chimerical, Terlecký could not continue to write any more in Russian, which to him signified merely a piece of nostalgia. On the other hand, Czech was the language of the place where he was adopted; Terlecký attempted to write in Czech and continued to do so until his final years. This is no longer a question of assimilation; however it reveals the question of identity as “an émigré,” not that of ethnicity. Thus we could treat him as a denationalized writer, i.e. as a writer who transcended the categories of a particular national literature.

He concludes *Curriculum vitae* with this passage: “as everybody has his own fate and his own fingerprints, no one will have the same fate.” It would be less productive to categorize him in the so-called “literature in exile.” Similarly, it would be less important to cram him into the “national” literature such as “Czech” or “Russian in exile.” The importance of Nikolaj Terlecký lies elsewhere. Terlecký goes beyond such categories. His works show us the possibility of reading and that of perception. In order to compare this aspect, it would also be useful to mention an affinity with the theory of “the quest for multiplicity” which Alexis Carrel evoked in *Man the Unknown*. In this respect, *Curriculum vitae* is not a mere autobiography but a text where the writer tries to maximize his own ego, especially representing many alternatives in his life, particularly an alternative called “exile.”